

氏名(本籍)	にわ けんたろう (愛知県)		
学位の種類	博士(学術)		
学位記番号	博甲第5189号		
学位授与年月日	平成21年8月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	児童養護施設在所児の言語能力に関する検討		
主査	筑波大学教授	博士(教育学)	園山繁樹
副査	筑波大学准教授	博士(心理学)	加藤克紀
副査	筑波大学准教授	医学博士	宇野彰
副査	筑波大学准教授	博士(心理学)	大六一志

論文の内容の要旨

(目的)

児童養護施設に在所する児童の言語能力については、言語性知能指数を指標とした研究や実践報告において、家庭で養育を受けた児童と比較して遅れがみられることが示唆されている。その理由として、児童養護施設入所以前の生活環境の影響や入所後の施設での生活環境の影響等が考えられる。しかし、児童養護施設在所児の言語表現の特徴やそれに関連した要因までを検討した研究はほとんどない。児童養護施設在所児における言語能力の特徴並びにそれに関連する要因を明らかにすることによって、児童養護施設における言語発達を補償する処遇の在り方に示唆が得られることが期待される。そこで、本研究においては、児童養護施設在所児の言語能力の遅滞の有無の検討、言語能力の中でも特に話し言葉に関する表現力と理解力の特徴の検討、それらに関連する要因の探索を目的とし、児童養護施設在所児並びに家庭で養育を受けている高校生を対象とした4つの研究を行った。

(研究1)

これまで児童養護施設在所児の言語性知能は、平均を下回ることが示唆されている。しかし、その研究は10年前のものである。そこで本研究では、現在の児童養護施設に在所する児童の言語性知能を明らかにすることを目的とした。そのために、児童養護施設在所児100名を対象に知能検査(WISC-III)を実施し、言語性知能指数、動作性知能指数、全検査知能指数について分析した。その結果、言語性知能指数は概ね境界線から平均の下にあり、また女兒においては知能の遅れがある割合が先行研究よりも多かった。さらに、言語性知能指数が動作性知能指数より有意に低い児童が理論値よりも多かった。これらの結果は、これまでも指摘されていた児童養護施設在所児の言語性知能の遅滞を改めて示唆するものであった。

(研究2)

研究1では言語性知能の低い児童が多いことが明らかになったが、本研究においてはさらに、実際の言語運用能力として話し言葉による表現の特徴を明らかにすることを目的とした。そのために、言語性知能指数が85以上を基本とし、児童養護施設に在所する高校生29名(施設群)と家庭で養育を受けている高校生29名(対照群)を対象に、アニメーション映像を視聴した後にその内容に関する質問に答える課題を実施し、語彙表現、統語表現、文末表現について検討した。その結果、1文当たりの品詞数については施設群で動詞

が有意に少なく、文末要素数は施設群が有意に多かった。また文末表現（「か」「ます」「だ」）の機能の分析から、施設群は明言化を避ける表現の使用者数が有意に多く、「思う」の使用者数が有意に少なかった。これらの結果から、児童養護施設在所児においては文の表現が比較的単純であったり、他者の心情に配慮した婉曲表現が少ないことが示唆された。

(研究 3)

児童養護施設在所児の言語理解の特徴を明らかにすることを目的とした。そのために、研究 2 と同様の対象児に対して、単語または 2 文節の文を読み、同じ意味をもつ単語を 5 つの選択肢から選択する語彙理解力テストを実施した。その結果、施設群では対照群よりも語彙理解力が有意に低かった。また、対照群の 9 割以上が正答であった「妥当な」「とりあえず」については、施設群では正答人数が有意に少なかった。

(研究 4)

研究 1～3 において児童養護施設在所児の言語性知能、言語表現力、言語理解力について、家庭で養育を受けている高校生等と比べていくつかの遅れが見られることが示唆された。そこで、本研究ではそれらの遅れに関連している要因を明らかにすることを目的とした。そのために、研究 2 と同様の対象児に対して、個人帰属要因として「虐待体験」「施設入所月齢」「施設在所月数」、及び日常生活の中での環境帰属要因として「メディア等との接触時間」「人との会話時間」との関連性を検討した。その結果、個人帰属要因については、虐待体験と言語能力に関連性は見られなかった。一方、施設入所月齢が低いと語彙理解力 (θ) が低かった。主成分分析によって、従属変数とした言語変数は 3 つの変数に分類された。各成分から最も負荷量の大きかった最大文長、語彙力 (θ)、「だ」の使用を選択した。環境帰属要因は 5 つの成分に分類され、各成分から最も負荷量の大きかった他の大人との会話時間、テレビの視聴時間、きょうだいとの会話時間、年上の子どもとの会話時間、漫画の読書時間を選択した。カテゴリカル回帰分析を行った結果、決定係数について対照群は有意であり、施設群は有意ではなかった。語彙理解力 (θ) の決定係数は両群共に有意であった。両群に共通しているのは、テレビ及びマンガが語彙理解力 (θ) と負の関係を示したことであり、きょうだいが語彙理解力 (θ) と正の関係を示したことであった。語彙理解力 (θ) において両群で結果が異なったのは、他の大人と接する時間と年上の子どもと接する時間であった。施設群では他の大人と接する時間が多ほど語彙理解力 (θ) は低かったが、対照群では関係がみられなかった。また、施設群では年上と接する時間は関係なかったが、対照群では正の関係があった。

(総合考察)

本研究の結果から、児童養護施設在所児の言語性知能が低い傾向にあることや、比較的単純な表現を使用していることが示唆された。言語表現の特徴としても、文末表現では明言化を避ける表現が多く、さらに、聞き手の心情に配慮した婉曲表現の使用が少ないことが明らかになった。この点も、児童養護施設在所児の文末表現が一般に幼いと感じられる要因になっていると考えられた。語彙理解力については、児童養護施設に在所する高校生の理解語彙量は、対照群よりも少なかった。これらの結果は、実践的・臨床的に示唆されてきた児童養護施設在所児の言語表現の乏しさについて、初めて実証的にその特徴を示唆するものであると言える。今後は、これら言語能力に関連する諸要因について、施設処遇の上での特別な支援の在り方を検討していくことが課題となる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

児童養護施設在所児の言語能力については、これまで、知能検査による言語性知能指数の低さ、並びに実践的・臨床的な視点からの言語表現の乏しさが示唆されてきた。しかしながら、これらのことについて実証的に検討した研究はほとんどなかった。本研究においては、言語性知能の遅滞を改めて確認しただけでなく、

新たに男女別の特徴の違いも示唆した。また、これまで検討されていなかった児童養護施設在り児の言語表現について、その特徴のいくつかが明らかにされた。このような結果が得られたことから、本研究は今後の児童養護施設在り児の言語能力に関する研究に対して、基礎的かつ重要な実証的データを提示したという点で、研究上大きな意義を有しており、博士論文としてのレベルにあると考えられる。しかしながら、言語能力のうち、話し言葉についての検討に焦点が置かれ、書き言葉については検討されていないこと、知能の他の側面との関連性の検討がなされていないこと、及び生育歴上の出来事や生活環境の関連性についての詳細な検討がなされていないことなどが、今後の課題として指摘される。

著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。